

日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.27(1), May, 2023

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 代表挨拶
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 箱根合宿研究会情報
- ♪ 定例研究会
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告!

巻頭言

ミネルバの梟に身を寄せて

篠田基行（元国際武道大学長・日本体育学会名誉会員）

形に囚われない気ままなスタンスで実学へのペンを執ることにしました。

書き出し。プラトンが老齡の旅人ソクラテスを『国家篇』の冒頭に登場させる対話場面を思い起こして。集まった老人たちが死に近づく恐れや心配を話している場所に居合わせる。そして至難に答える会話がある。「希望は正義と聖心に住める者の魂をかい抱く、さて彼の老年の乳母となり、彼の旅路の連れとなる。——人間の休みなき魂を統ぶる全能者たる希望こそ」と、ピンダロスの詞を借りて「楽しい希望こそ彼の老年の親切な乳母なのぢゃ」（松村正俊訳）と話す。これより私老梟から希望と期待を寄せる一筆にしたい。

旨く言語化できるか。龍之介の「文を作るのに欠くべからざるものは何よりも創作的情熱である。そのまた創作的情熱を燃え立たせるのに欠くべからざるものは何よりもある程度の健康である。スエエデン体操、菜食主義……等を軽んずるものは文を作らんとするものの志ではない」（侏儒の言葉）を念頭に置きながら。

加えて永遠に志すべき最大最高の概念とは何か。“驚き”から“生きる”実学を念頭に置くことにしました。

理由は専攻分野が諸科学や学芸の教養を確証することへの一役を担いたい思いからです。そこで勝手な妄言だと思いながら次の事項を選出しました。

話題の対話型 AI（チャット GPT）について。私のスタンスはプラス志向です。新しいものへの発見や提唱には必ず抵抗があります。かつて私は学知・知見は統計処理方式でと。知見の扱いはデータと心得、視点を集合の母体となる底辺に還元する手法を採りました。知見はデータ（記号）。バカとハサミは……。でも自重あれと叱責をもらったことが。

職業人（大学人）の使命は何処に。「実学一帯～2道流」が私の信条です。教養ある実践人を育成し社会のフロントに立たせる役割を遂々忘れがちです。

哲学の起源を何処に。“驚き”から“生きる”実学へという思潮の中で、やはり「両義性」を信じて。身を置く学園には建学の精神があります。此の理解と実践の第一人者になることです。街頭に立つソクラテスなみに。これを幾度でも投稿することです。

主眼とする先行思想を見抜くことです。

私の例1 フォイエルバッハ『死と不死について』 主題は「自然死」。しかしアリストテレスが既に心理学（精神論・小論集）で取り上げている。誰も気付かない。

その 2 大先輩から請われた、若いマルクスが何事も身体組織からなる一番の優先事項は「受苦」だと指弾している。ここに体育の根源を見出したいと。調べる。国語辞典にはない。ドイツ語辞典にはある。文豪龍之介も芭蕉の生涯は受苦であったと。キリストの誕生を記する言葉に受苦がある。しかし点を線に関係づける考究に懊悩している。

その 3 金子武蔵著『古代哲学史』を読む。すると現代哲学で扱われる運動など、自然を驚きの感覚で捉えようとした知見がどっさりと。哲学の起点がここに。驚きです。

権利として法の下に自主的精神に充ちた心身共健康な国民の育成が平等に保証されているのかと眉を顰めます。総人口 1 億 2494 万 7 千人のうち 65 歳以上が 29% を占めるという。人口は先細りの中で高齢者が増える。この国勢に大胆に挑戦する提言があってよいと思ふ。真理と正義。体は枯れても心を生きる闘志を夢見て。

篠田基行 (moto-shino@lemon.plala.or.jp)

代表挨拶

代表挨拶

関根正美 (日本体育大学)

2023 年 4 月から専門領域運営委員会の体制が 2 年の任期で変わりました。また、日本体育・スポーツ・健康学会（以下、学会と呼びます）に関係する委員の方々も新たな選出時期になっています。3 月まで運営委員をお勤めいただいた先生方、また学会の編集委員をはじめ各種委員をお勤めいただいた先生方にお礼申し上げます。運営委員、学会関連の委員に新たに選出された会員各位におかれましては、ご多忙のところとは存じますがご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

今回の委員交代には学会における領域横断の応用研究部会が含まれています。体育哲学選出の委員の方々全員が留任となりました。専門領域という組織の立場からすれば半分の交代が望ましいのかもしれませんが、これには理由があります。それは、すべての委員が研究部会の側から留任を求められたからでした。当初はすべての部会に委員を送り出す必要があるのかという意見もありましたが、体育哲学はあらゆる領域の原理を担うべきとの考えから、運営委員会として各先生方に委員として応用部会に出させていただきました。今回の全部会からの留任要請は委員各位の普段の奮闘と部会への貢献によるもので、専門領域としても嬉しいことです。

専門領域の役割と課題が研究活動を通じた学術の発展にあることは、いうまでもありません。そしてもう一つ、体育哲学は体育諸学の基礎づけ、体育学における概念や主張立場の交通整理の役割を担っているといえます。この見方は近代的に過ぎるとの批判もあるでしょう。しかし、事は哲学一般ではなく体育学に関わることです。体育哲学の役割は専門に潜行するだけではないでしょう。このような役割を果たす一つの試みとして、昨年から e 事典の検討が WG グループで始まっています。限られた予算の中で体育哲学の研究成果を体育学全体さらには社会に還元する道を探っています。今後は編集・運用方針や執筆依頼などが具体化されると思います。

専門領域の活動の中心は学会や専門領域研究会の場における研究発表と『体育学研究』(和・欧文誌)『体育哲学年報』への公表にあることは確かです。この基礎があつてはじめて、様々な企画は現実のものとなります。会員の皆様におかれましては、ぜひとも研究成果を積極的に公表していただきますようお願い申し上げます。

関根正美 (msekine@nittai.ac.jp)

筆者は1936年に生まれ、1955年に東京教育大学体育学部体育学科に入学し体育学第一講座（原論）に所属した。哲学を正規に学んではないが、以来体育原理（哲学）の領域で活動してきた。

1. 思索の背景

高校卒業を控えて将来について不安になり、三木清の「人生論ノート」により“構想力”、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」により“人間の精神的成長”、またシュヴァイツァーやタゴールの著作により“人間愛”等について考えた。大学の授業でアレキシス・カレルの「人間この未知なるもの」や「生命の知恵」を紹介され、「人間の科学」（自然科学・生理学・医学・心理学・哲学・宗教・歴史等の全体的・統合的知識）の構想に基づいて、“人間を理解し自らも他の人々と共に生きる”という信条を形成し、自ら人間を科学的・理論的・客観的に理解して、体育の専門的研究・教育の領域で活動し努力してきた。

2. 問題意識

制度的に組織化された「教育」における“体育”は、現実に生きている人々の自然的・文化的諸特性の科学的・客観的知見に基づいて論理的に構築され、個人の望ましい発達可能性の実現のために適切に実践されているだろうか。このことは専攻科（‘59年から2年間在籍）における研究課題であり、以来“人間の科学的・客観的・理論的知識に基づき、如何に体育・スポーツにおいて個人の発達可能性の実現に寄与するか”について思索してきた。

3. 解決方法

ホーキング（1992年）は、彼の宇宙理論「宇宙における生命」（NTT出版、1993年）を展開する中で、人間を「知的生命体」と定義し、その過去から現在および未来における進化の過程を考察・予測している。また、多くの生命科学者や人間の意識的行動や文化の形成に関心を持つ知識人たちは、地球上の生命体のゲノム分析・考察等によるヒトの進化的諸特性を考察し、その基本的な自然的（Nature）・文化的（Culture）特性と、その相互関係の中で営まれる教育や養育（Nurture）の特性について検討し、適切な文化の創造と人類の存続の方向について模索している。オーストラランド等によれば、“人間の身体は活動するために作られている”。21世紀の歴史的現実における体育は、これらの諸事実の科学的・客観的・理論的見解に基づいて、人間の特性と共に個々人の身体活動の特性を理解し、系統的な組織的プログラムを制度的に確立して、個人の望ましい発達可能性を実現するよう構築され遂行されるべきである。

4. 結果の状況（筆者の体験による）

筆者の学習能力と実践の努力は多くの面で明らかに不十分であった。個人的には、上京以来のヨーガの理論の学習や実修（「ヨーガ・スートラ」等）、近年における「般若心経」（解説書）や「ブッダのことば」（現代語訳）の読解、そしてポパーの科学哲学、エクルスの神経生物学の諸著作やボームの対話集等、最新の「宇宙・地球科学」、「生命科学」、「身体活動科学」、「生理・解剖学」、「医学・保健学」、「哲学・宗教学」、「歴史学」等の読書と、クーパーの「エアロビクス」理論に基づく実践によって、“人間存在”としての自己の理解に基づく日常的な心身の管理は、かなり適切に遂行できるようになった。しかし、上述してきたことを対話等によって他の人々に説明し、各自が納得した上で意識的に実践することを促すのは、非常に難しいことではある・・・。

補足：神経生物学者のJ.C. EcclesによるHow the Self Controls Its Brain（Springer-Verlag, 1994.）は、まだ翻訳されていないようであるが、表題から、教育・体育における“人間の意識と行動の理解”において興味を惹かれる。

石川旦（obo.1963@s6.dion.ne.jp）

「哲学（フィロソフィア）」は「知」を愛することである。となると「体育哲学」は「身体教育」の「知」を愛する学問となる。「体育哲学」において「知」を論じるシンポジウムが開かれていた。第49回（1998）体育学会では井上誠治が企画した「運動の知性的意味を探る（2）-運動と知と教育-」、演者は滝沢文雄/矢野智司/山口順子。第50回（1999）記念大会では運動学と体育・スポーツ哲学が共催し企画した「スポーツと『身体知』」、司会は朝岡正雄、演者は渡辺伸/滝沢文雄/佐々木正人。第63回（2012）では釜崎太が企画した「身体知研究の現在 -身体教育の可能性を探る-」、演者は田中彰吾/生田久美子/樋口聡。これらのシンポジウムでは「意味生成、非知の体験（矢野）」「アフォーダンス性（佐々木）」「身体図式の更新（田中）」「わざ言語（生田）」など、新しい身体運動の見方（知）が提言され「体育哲学」が「身体教育」の「知」を愛していることが証明された。

しかし「身体教育」の「知」とは何だろう。「身体教育」は身体の運動のやり方を対象として、その「技術」を知りたいことを求める。科学は「How」と考え、そのやり方を知ろうとする。「知」を愛する哲学は「What」と考え、その本質を知ろうとする。「身体教育」において「技術」を知りたいとはどのような「知」なのか。私はそんな愛の中でこの書籍と出会った。以下、「技術とは何か」で村上が論じた印象的なフレーズを紹介しよう。

「序論」：技術の場合には「知識」という形で囲い込むことのできる明確な外延をもたない p.20。「1.技術の基礎」：全身的で多様な感覚体験、というよりはむしろ身体体験の総合的な結果と脳の状態との間には、相互に強い関連があると考えられる p.32。「2.社会と技術」：人間はことば、言語、のちには文字による認識や伝達を頼るあまり、じっさいに、身体知レベルでの体験や世界に対して、貧しく、かつ鈍くなりつつあるかもしれない p.64。（古代ギリシア世界の提案）その一つは、知識と技術の分離である。もう一つは、知識から分離された技術を、知識の下位に置いたことである p.77。「3.技術と科学」：（化学の人工肥料の発明など）極めて実用的で実地の問題を解決する能力をもった知識（科学）であった（F.ベーコンの「知は力なり」という標語に合わせた記述） p.129。「4.社会的制度と技術」：（科学と技術が教育制度で融合、その研究開発を国家社会が支援：歴史）今世紀の自然科学が相手にしているのは、決して、ありのままの自然などではなく、人間の技術力の作り出した技術的状态であることを忘れてはなるまい p.163。「5.日本と技術」（戦後の日本の技術観）技術を支えている価値観、文化的意味をもすべて取り入れようとする姿勢が、そこにあった p.196。洋の東西を問わないような普遍的な「人間性」なるものを押し立てて、技術が人間性に背く、とか、「非人間的」であり、技術的発展はつねに人間疎外を生む、と言い放つことは、むしろ知的不誠実である p.202。技術（アート）に人為として人間的な成熟を与えるのは誰でもない、人間なのである p.204。

村上が運動技術を論じている訳ではないが、プラトンの「テクネ」と「エスピテメー（知の能力）」の結びつけからわが国の戦後の技術観までを知ることができる。「知は力なり」である。でも、その「知」は「wisdom（知恵）」「intellect（知力）」「knowledge（知識）」なのか、愛した「身体教育」の「知」は未だに知ることができない。

長年オリンピック研究に携わってきた身として、「東京 2020 大会」は最も記憶に残る大会となった。オリンピック・パラリンピックの歴史に「コロナ禍による初の延期と無観客大会」としてその名を刻んだだけでなく、「腐敗した大会」としてもその名を残したからである。

「東京 2020 大会」関係で問題視された出来事はそのスタートから数多いが、中でも森元会長の女性蔑視発言、開会式演出者達の差別発言、高橋元理事の贈収賄事件、広告代理店の談合問題などが誰にも思い浮かぶであろう。しかし、それらの事件が問題であるとの認識やそれらの判断基準は一体何に基づいて議論されているのだろうか？ スポーツが政治・経済・社会とは無関係にはあり得ない存在であるからには、それらの一般的な商業主義批判の商道徳や人権尊重の参照枠組みに基づいて判断や批判が行われることは当然である。しかし、それだけではオリンピック研究には不十分な点があるように思われる。

一般的に言えば、社会事象の現状認識は、認識論であり「ザイン実在」中心の見方となり、その方法と材料（データ）が重要となる。一方、それに対する現状批判は、価値論であり「ゾルレン当為」中心の見方となり、その批判や判断の参照基準（理想・思想）が重要となる。しかしながら、これも一般的な物言いであるが、現実主義者は理想論を夢物語や机上の空論と批判し排除するし、理想論者は現実主義を方向性無き場当たり主義と批判し排除する。しかし、両者の関係はこのような対立関係で良いのであろうか？ 現状を批判する際には、参照枠としての物事の理想的なあり方を前提とするはずであるからである。このように考えると、現実主義（ザイン）と理想主義（ゾルレン）の両方の理論が相俟っての「東京 2020 大会」批判が重要であるように思われる。

そうすると、オリンピック・パラリンピックそのものを知る（ザイン中心の認識論）必要があるとともにその理想的あり方（ゾルレン当為中心の理想論）を知る必要がある。しかしながら、「東京 2020 大会」の批判の現状を振り返ってみると、オリンピックの認識・理想両論が不十分のように思われる。商業主義に墮落したとするオリンピック批判、祝賀資本主義とするオリンピック批判などは傾聴するに値する。しかし、物事を完全否定するだけでは、どう改善していった人間にとって良き文化としていけば良いのかの方向性は窺えない。オリンピックの理想論との融合が欠けていると言わざるを得ない。また、「東京 2020 大会」の現実認識に置いてはデータ（事実）に基づいた検証が必要である。しかし、東京都や元組織委員会のオリンピック・パラリンピック関係の情報管理と提供体制は、この現実認識を確実なものとするには不十分であると言わざるを得ない。

加えて、オリンピックの理想論を欠いた組織委員会や東京都の大会の準備運営体制では、いったい何を最終（究極）目的として大会を開催しようとしたのか不明である。オリンピックが世界平和の希求運動であることを放棄して、大会運営を目指したり開会式でメッセージを発信したりすると、単なる都市開発と経済振興や観光開発に利するようなオリンピック・パラリンピック観と資本主義のイベント観に支配されるだけである。「オリンピック休戦決議」の存在や「休戦の壁画」の存在を知らない日本人の何と多いことか。

「オリンピズムの伝道師（自称）」としては、オリンピック運動というものは「積極的平和希求」の世界的な社会運動であるという理想を理解し、この理想論が日本にもっと知られていく必要があるように思われる。それは、人権尊重や差別のない平和な世界をもたらそうという未達の平和希求運動であると知らしめることも、体育哲学の課題であろう。

箱根合宿研究会情報

箱根合宿研究会 2023 in HAKONE (第1報)

大津 克哉 (東海大学)

本年度は下記の要領で合宿研究会を開催します。今回も連休に重ねて土日・祝日(敬老の日)の日程で組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。現在のところご案内通り9月に実施する予定ですが、開催方法につきましては、「対面・オンライン・ハイブリッド開催」等、運営委員会にて検討し、改めてメーリングリストならびに第2報でお知らせさせていただきます。

期日：2023年9月16日(土)、17日(日)、18日(月・祝日)

場所：国民宿舎 箱根太陽山荘

(住所) 〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1320-375 (電話) TEL.0460-82-3388
小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり左手に/ケーブルカー脇の坂道を約50mほど登った右手にあります。

☆日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)(*は運営委員会)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20時
16日(土)						受付	研究会①				夕食			
17日(日)		朝食	研究会②			昼食*	研究会③				懇親会			
18日(月)		朝食	研究会④		事務協議	解散								

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。大津 otsu@tokai-u.jp までよろしく願いいたします。

☆費用：35,000円程度(予定)金額は変更になる場合もあります。

- ・研究会参加費：3,000円
- ・宿泊費等：32,000円(全日程参加の場合：2泊朝夕食、懇親会費を含む) ※1泊夕朝食：16,000円
 - ・中日の昼食代は別途1,500円
 - ・学生、院生、研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

☆6月14日(水)必着にてお申込み下さい。

3ヶ月前までに予約を完了させねばなりません。人数把握のためにご協力ください。

- ・Eメール：お名前、ご所属、連絡先、発表の有無、宿泊のご予定(食事の有無を含む)について、東海大学 大津 (otsu@tokai-u.jp) までお知らせください。
- ・特に、部分参加の場合は、宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。
[16夕食, 16宿泊, 17朝食, 17昼食, 17夕食, 17宿泊, 18朝食]

- ・参加予定に変更が生じた場合は、速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・10日前までにご連絡がない場合にはキャンセル料が発生します。宿泊前日は宿泊料の50%、当日は宿泊料の全額がキャンセル料となりますので、ご注意ください。
- ・不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡下さい。

☆詳しい「プログラム」は、9月中旬にお送りする予定です。

☆今後の事態の変化を見ながら運営委員会にて実施の可否を検討することもあります。

いずれにしましても、運営委員会では会員の皆様に不利益が被らないよう、決定事項を速やかにお伝えするようにいたします。会員の皆様におかれましては、社会的にも精神的にも厳しい状況下ではありますが、それぞれの事情の下できる範囲で研究成果の蓄積をお願い申し上げます。

合宿研究会担当運営委員：大津克哉

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科

E-mail : otsu@tokai-u.jp Tel : 0463-58-1211 (代表) Fax : 0463-50-2056

(お問い合わせには、なるべく E-mail をご利用下さい。)

定例研究会

第1回定例研究会のご案内

佐々木 究 (京都産業大学)

日程 : 2023年6月3日(土) 15:00-17:00

開催方法 : オンライン (zoom)

注意事項 : オンライン配信の閲覧情報はメーリングリストで配信します。メーリングリストへの登録をお願いします。会員以外が閲覧する場合は、会員から研究担当にご連絡ください。また参加者は当日実施する出席調査(Google Forms)に記入をお願いします。

【プログラム】

15:00 代表挨拶 関根正美 (日本体育大学)

15:05 研究発表 水島徳彦 (小田原短期大学) 阿部悟郎 (東海大学)

競技者の「自己愛」に関する一考察 : カント倫理学の「自己愛」概念を手がかりに

[概要]

本発表は、競技者の「自己愛」に関して検討を行う。そもそも競技者という存在は、「勝利の追求」を目的として行為をする存在であり、そのための手段として選択される行為のうちには、倫理的問題を含むものがある。そして、それらの倫理的問題の背後には、勝敗の決着という排他的な競技スポーツの構造とともに、行為選択する競技者自身の目に見えない行為の内的原理がある。

本発表では、その内的原理のうち、とりわけ「自己愛」というものに着目しながら競技者という存在に迫ることとする。

15:35 内山治樹先生 ご退職記念講演

「理論知と実践知との融合」というアポリアから脱出するための方法論の探求

[演者紹介]

内山治樹先生は、筑波大学大学院を修了後、埼玉大学、筑波大学で長く教鞭を執られ、筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学専攻長、同研究科長、人間総合科学学術院長などの要職を歴任、今年3月に定年退職を迎えられました。

この間、ご専門であるバスケットボールを対象とする研究を一貫して進められ、本専門領域のみならず、日本体育・スポーツ哲学会、日本スポーツ方法学会などでも多くの業績を挙げられています。

令和5年4月より日本体育大学で教授職をお務めですが、今回ではこれまでの歩みを振り返りながら、ご自身の研究活動、教育活動についてご講演頂きます。

16:55 副代表挨拶 深澤浩洋 (筑波大学)

【問い合わせ先：研究担当】

佐々木 究 (sasaki9@cc.kyoto-su.ac.jp)

阿部 悟郎 (gr-abe@tsc.u-tokai.ac.jp)

事務局より

田井健太郎 (群馬大学)

○ 「日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会」について

本年度の日本体育・スポーツ・健康学会大会についての情報は、大会web (<https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss73/top>) にて閲覧することができます。本専門領域に関連するプログラムも、この学会大会 HP に公開されます。現時点で公開されている企画は次の通りです。

・大会3日目 9月1日(金) 会場：同志社大学

- 浅田学術奨励賞・記念講演

テーマ レガシーとしてのオリンピック・パラリンピック教育の可能性

演者 岡田悠佑 (明治学院大学)

○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局 (<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>) にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。

また、**専門領域メーリングリスト** (talk@pdpe.jp) にご登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらに関しては、事務局 (bureau@pdpe.jp) までご一報ください。メーリングリストに登録した**メールアドレス変更の際も、事務局までご一報ください。**

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下されます方は、広報担当：荒牧 (ai.aramaki@cc.musashi.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第27巻第1号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域

関根正美 (代表)

編集者 荒牧亜衣, 石垣健二, 坂本拓弥 (広報担当)

発行日 令和5年5月15日

連絡先 〒371-8510

群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付

電話：027-220-7326

【編集後記】

コロナ禍からの解放とともに、会報担当も新メンバーとなりました。どうか2年間よろしく願いたします。執筆依頼がありましたら、どうか「はい」か「イエス」で即答いただけますと幸いです。

さて、今回の大御所執筆者をご覧になりさぞ驚かれた会員も多かったかと。篠田基行先生や石川旦先生は、小生にとってはまさに旧箱根太陽山荘の雲上人（厳かな木造建築の最上階に緊張して行くと拝顔できる先生）でしたし、久保正秋先生や舩本直文先生は、もちろんその時代から箱根静雲荘の時代まで長らく酒席ご指導いただいた先生です。時代が変われど、変わらぬことを問い続けられる姿に、変わらず学ばせていただき感謝の言葉しかありません。コロナ明け、新太陽山荘の合宿の案内もあったことですし、また是非とも対面と… (I)